

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：53901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370098

研究課題名(和文)ドイツを中心とした技術哲学の歴史的研究

研究課題名(英文)Historical Study of the Philosophy of Technology

研究代表者

北野 孝志 (KITANO, Takashi)

豊田工業高等専門学校・一般学科・教授

研究者番号：20390461

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：1877年にE.カップが初めて「技術の哲学」という表現を用いて著書を刊行して以降、長い伝統を持ってドイツを中心に展開されてきた技術哲学を歴史的に振り返り、そうした技術哲学の伝統が、技術倫理の考え方にどのような影響を及ぼしているのかについて研究した。そして、その成果を学会発表や論文を通して公表した。

その際、技術評価の問題を哲学的に論じる意義が見いだされ、日本においてもこうした問題に哲学者が貢献する上での課題と可能性が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：We investigated the philosophy of technology in its historical aspects, which has developed in Germany, since E. Kapp first used the phrase "Philosophie der Technik (philosophy of technology)" as the title of a book 1877. And we also investigated how this tradition in the philosophy of technology has influenced thought of the engineering ethics. Those results were made public in some oral presentations and research papers. In this research the significance of discussing the problems of technology assessment in philosophical perspectives becomes evident. And we also clarified issues and possibilities for philosophers' contribution to the technology assessment in Japan.

研究分野：哲学

キーワード：技術哲学 ドイツ 思想史

## 1. 研究開始当初の背景

(1) ドイツにおいて、技術哲学に関する長い伝統があり、最近においても技術哲学の概説書などが立て続けに出版されていることは、あまり知られていない。これは、日本において技術が哲学の扱うテーマとしてそれほど重視されてこなかったのに対して、ドイツでは現代の社会や文化を本質的に規定するものとして、哲学の中心的なテーマの1つとみなされてきたということが理由であるように思われる。そこで、こうしたドイツにおける技術哲学の歴史を紹介する意義がある。

(2) 一方、日本においてもE.カッシーラーやM.ハイデガー、K.ヤスパース、さらにはA.ゲーレンといった哲学者たちの技術論はそれなりに紹介されてきているが、それはそれぞれの哲学者の思想の一部として技術論が考察されているだけであり、必ずしも技術哲学の伝統の中に位置づけられるものにはなっていない。ドイツでは、技術哲学の伝統の中で論じられることによって、ハイデガーやヤスパースの思想などは場合によっては批判的に論じられたり、否定的に扱われたりしている。それゆえ、技術哲学の歴史を1つの流れとしてまとめ上げ、その中に個々の哲学者たちの思想を位置づけていくような研究が日本においても必要であると考えられる。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、まずドイツで刊行されてきた技術哲学に関する概説書やその他の欧米諸国や日本で技術哲学に触れている文献などを参考にすることにより、技術哲学の歴史を概観し、それぞれの時代背景における技術哲学の特徴を明らかにすることである。

(2) その際、技術哲学の創始者カップや、20世紀前半のドイツにおける技術哲学を本質的に規定したとされるF.デッサウアーだけでなく、カッシーラーやハイデガー、ヤスパース、ゲーレンやJ.ハーバーマスなどの思想を考察するとともに、応用倫理学者としても活躍し、技術倫理の研究にも従事しているH.レンク、G.ローポール、C.フービッチといった研究者たちがそれ以前の思想をどのように吸収し、それぞれの思想を展開しているのかも明らかにする。そのことにより、技術が現代の社会や文化を本質的に規定するものとして、哲学研究の中心に据えられるための基礎研究とすることも研究目的の1つとなる。

(3) さらにそれと関連して、ドイツ技術者

協会(VDI)をはじめ、技術倫理の考え方がこうした哲学者たちの思想とどのような関係にあるのについても、その歴史的背景を踏まえて明らかにし、それに基づいて日本における技術倫理の考え方を検討し直すための基礎を提供することも研究目的としている。

## 3. 研究の方法

(1) まずドイツで刊行されてきた技術哲学に関する概説書、例えばF.ラップ編集の『技術と哲学 Technik und Philosophie』(1990)をはじめとしてC.フービッチら編集の『技術に関する思索 Nachdenken über Technik』(2001)、P.フィッシャーの『技術の哲学 Philosophie der Technik』(2004)、A.ノルトマンの『技術哲学 Technikphilosophie』(2008)またその他の欧米諸国や日本で技術哲学に触れている文献などを概観し、それらを参考に検討する文献について確認し、ドイツ・ベルリンの国立図書館などを通して資料の閲覧・収集を行う。

(2) カップが「技術の哲学」という表現を用いて刊行した『技術の哲学の基礎 新たな視点からの文化の生成史 Grundlinien einer Philosophie der Technik: Zur Entstehungsgeschichte der Cultur aus neuen Gesichtspunkten』(1877)やE.カッシーラーの『形式と技術 Form und Technik』(1930)そしてF.デッサウアーの『技術の哲学 Philosophie der Technik』(1926)その拡大版として第2次世界大戦後に刊行した『技術をめぐる衝突 現実化の問題 Streit um die Technik: Das Problem der Realisierung』(1956)などを検討することによって、技術哲学と2つの世界大戦がどのような関係にあったのかを明らかにする。

(3) さらに、技術哲学の思想の影響を受けつつ、アメリカの技術倫理に対応して技術論を展開したH.レンクやG.ローポール、そしてフービッチなどVDIの哲学者の考え方にある、日本やアメリカにはない技術倫理への視点を解明するために、彼らの著作の検討やVDIでのインタビューなどを通して、それ以前の技術哲学の思想がどのように影響しているのかを明確にしつつ、技術倫理の今後の課題について考えるとともに、日本における技術倫理研究の今後の展望についても明らかにする。

## 4. 研究成果

(1) まずドイツで刊行された技術哲学の概

説書等を概観し、ピックアップした思想を初期の頃から検討した。初めて「技術の哲学」という書名を用いた E. カップ、そして 20 世紀前半のドイツにおける技術哲学を本質的に規定したとされる F. デッサウアーの技術哲学等を中心に検討し、当時ドイツにおいて何が重要な論点になっていたかを明確にし、日本における評価にも触れる形でまとめ、「カップの技術哲学」、「デッサウアーの技術哲学」という 2 本の論文を発表した。特に、「デッサウアーの技術哲学」においては、第 2 次世界大戦との関係においてデッサウアーの思想がどのような役割を果たしたのかも明らかにした。

一方、当時の日本での技術哲学の受容のあり方についても考察した。かつての日本においては、ドイツの技術哲学研究の流れに呼応する形で、第 2 次世界大戦前後に技術哲学が研究され、邦訳についても多数刊行されるとともに、技術哲学をタイトルとする著書も出版されていた。そこで、特にドイツの技術哲学を受容しつつ、技術とは何かについて深く思索を重ねた三木清と三枝博音の思想を中心に、当時のドイツの思想と比較しながら、彼らがドイツの技術哲学をどのように受容し、どのような批判から独自の技術論を展開しているのかを考察し、その成果を中部哲学会において「三木清と三枝博音の技術哲学 日本におけるドイツ技術哲学の受容という観点から」と題して発表し、論文としてもまとめた。

(2) 次に、国立国会図書館やドイツ・ベルリンの国会図書館で収集した資料などを検討し、研究協力者と翻訳しつつ問題点を整理した。特に第 2 次世界大戦前後のドイツの技術哲学に関する資料を考察し、当時の技術哲学の思想やその歴史的背景について考察し、応用哲学会において「戦争と技術哲学 技術哲学への一視点」と題した研究発表を行った。そこでは、第一次世界大戦、第二次世界大戦をはさんで、ドイツや日本での技術哲学の歴史がどのように展開されたのかを扱った。

さらに、1960 年代から 1970 年代にかけての技術哲学の歴史に焦点を当て、研究した。この時期は、第 2 次世界大戦後戦争への反省も踏まえつつも、新しい技術が次々と現れ、技術哲学が大きく転換する過渡期といえるが、日本ではほとんど紹介されることもほとんどなく、必ずしも注目されてこなかった。しかし、アメリカの技術哲学や技術倫理の影響がドイツにもたらされた際にも 60 年代・70 年代の技術哲学の影響がみられ、重要な意義を持つ時期であることが明らかとなった。こうした研究成果を、応用哲学会において「技術哲学の過渡期としての 60~70 年代」と題して発表した。

(3) 一方、このことと関連してドイツ・デュッセルドルフの VDI 本部を訪問しインタビ

ューするするなどし、1960 年代以降 VDI の中央部会「人間と技術」で活躍したクラウス・トゥッヘルやいわゆる「VDI の哲学者たち」の活動について情報収集した。そうした研究成果の 1 つとして、「人間と技術 トゥッヘル技術哲学」と題した論文を発表した。ここでは、ドイツにおいて技術哲学が研究としての伝統を持ち、その後の技術倫理の研究にも大きな影響を与えている背景に、VDI の中央部会「人間と技術」に参加した哲学者たち、特にその中でも設立当初からこの「人間と技術」の運営に関わったトゥッヘルへの貢献があったということを示した。

(4) こうした中で、新たな課題としてドイツにおけるテクノロジー・アセスメント(TA)の取り組みと、それに対する技術哲学者の貢献という問題が浮かび上がり、国立国会図書館やドイツ・ベルリンの国会図書館を利用して調査した。こうした調査の結果、ドイツにおける技術評価の制度は、アメリカや他のヨーロッパ諸国のそれとは異なり、固有の歴史と特徴を持っていることが明らかになり、その成果を応用哲学会において「技術評価の問題に関する哲学の貢献について」と題して発表した。そこでは、1960 年代に始まるアメリカ議会でテクノロジー・アセスメント(TA)の取り組みを踏まえつつ、それとの関連でヨーロッパ、特にドイツにおける議会 TA の取り組みをまとめ、ドイツにおける事情を詳細に考察した。その際、VDI の「技術評価」という委員会において哲学者たちが果たした役割について考察し、技術評価の課題や今後について検討した。それと並行して、TA の様々なコンセプトも分類し、参加型 TA の持つ意義と日本において TA を根付かせる上での哲学者の貢献について検討した。

技術評価に関する哲学的研究書は、日本ではほとんど紹介されることがないもの、ドイツでは非常に多く刊行されていることから、ベルリンの国立図書館等を利用し、調査した。こうした研究を踏まえ、中部哲学会のシンポジウム「現代における対話の可能性」における提題者の 1 人として「科学技術時代における対話の可能性」と題した研究発表を行った。そこでは、ドイツでの技術哲学の歴史、ゲーレンやハーバーマスの思想、さらには VDI の哲学者たちの取り組みなどにも触れつつ、科学技術の問題に関する対話の重要性、特に市民参加型の技術評価の可能性について示し、他の提題者などと議論した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

北野孝志、人間と技術 トゥッヘル技

術哲学、豊田工業高等専門学校研究紀要、査読無、48、2016、91-96

北野孝志、三木清と三枝博音の技術哲学  
日本におけるドイツ技術哲学の受容という観点から、中部哲学会年報、査読有、46、2015、95-107

北野孝志、カップの技術哲学、豊田工業高等専門学校研究紀要、査読無、46、2014、115-118 2014年1月

北野孝志、デッサウアーの技術哲学、豊田工業高等専門学校研究紀要、査読無、46、2014、119-124

〔学会発表〕(計 5件)

北野孝志、科学技術の時代における対話の可能性(シンポジウム「現代における対話の可能性」)、中部哲学会(於名古屋芸術大学)、2016年9月17日

北野孝志、技術評価の問題に関する哲学の貢献について、応用哲学会(於慶應義塾大学)、2016年5月8日

北野孝志、技術哲学の過渡期としての60~70年代、応用哲学会(於東北大学)、2015年4月25日

北野孝志、戦争と技術哲学 技術哲学への一視点、応用哲学会(於関西大学)、2014年5月11日

北野孝志、三木清と三枝博音の技術哲学  
日本におけるドイツ技術哲学の受容という観点から、中部哲学会(於信州大学)、2013年9月28日

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：

発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

北野孝志(KITANO TAKASHI)  
豊田工業高等専門学校・一般学科・教授  
研究者番号：20390461

### (2) 研究分担者

なし  
研究者番号：

### (3) 連携研究者

なし  
研究者番号：

### (4) 研究協力者

なし  
研究者番号：